

Title	Kiplingの東洋理解 : Kimとチベット仏教について
Author(s)	伊勢, 芳夫
Citation	言語文化研究. 2000, 26, p. 199-217
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/52431">https://doi.org/10.18910/52431</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## Kipling の東洋理解

— Kim とチベット仏教について —

伊 勢 芳 夫

### 1. はじめに

Rudyard Kipling は、19世紀後半から20世紀前半にかけての大英帝国のプロパガンディストとみなされることが多い。はたして彼は、ジャーナリストとして七年間インドに暮らす人々と接触し、そこで見聞した様々な人々の暮らしや風習を作品の背景として使っただけなのか、それともその生活の根底に流れる宗教・思想に対する鋭い洞察を作品に反映させたのであろうか。この論文において、Kipling の東洋理解のあり様を、*Kim* を検証することで探っていきたい。

*Kim* はチベット仏教僧 Teshoo Lama の献身的な弟子であると同時に、有能な大英帝国のスパイになっていく少年 Kim の物語を描いた作品である。したがって、舞台はインド亜大陸にとりながら、近代西欧の世界戦略と、インドから極東までに強く根ざした仏教思想という二つのベクトルが、主要登場人物を動かしていく物語である。しかし、後述するように、従来の *Kim* 批評においては、英国のインド支配と、インドの民族性に関する議論が多く、the lama の具現するゴータマ・ブッダの理念に関する考察はあまりなされていないようである。私の知るところでは、Vasant A. Shahane や Peter Hopkirk ぐらいである。むしろ、あらゆる穢れを洗い流す “the River of the Arrow” を探し求める the lama は、Kim の諜報活動の方便に使われただけの、一見現実味のない理想化された人物として扱われるのが一般的ではないだろうか。ただ、the lama の存在は、インドの風景の一つとして考えることはできない。なぜなら、インドの仏教は、13世紀初頭にイスラム教徒の侵攻を受けて衰退し、ヒンドゥー教の中に吸収されたのであり、<sup>1)</sup> 北伝（大乘）仏教にしろ、南伝（上座部・小乗）仏教にしろ、インド以外のセイロン（スリランカ）、東南アジア、そして東アジアの宗教である。つまり、19世紀末時点で、北東の方角からムガル帝国の滅亡後の英国領インドにやってきた Teshoo Lama は、かつてのインド仏教を研究しにやってきたチベット人ではなく——つまり周縁の間人では

1) 早島鏡正他、『インド思想史』（東京大学出版会、1982）、237頁によると、1971年のインドの国勢調査では、ヒンドゥー教徒は4億5329万人（82.7%）、イスラム教徒6142万人（11.2%）に対して、仏教徒は381万人（0.7%）であった。但し、仏教徒は近年増加傾向にあるという。

なく——インド以東の文化を代表する存在だと考えられる。そして小説自体も、the lama の風貌や所持品を中国と結び付けることによって、また、しばしば唱える中国語のお経によって、彼をインドの遥東方からやってきた人物として描いている。そういう意味で、*Kim* はインドを基軸として西と東の問題を扱っているといっても間違いはないであろう。

Kipling の同時代の英語圏の作家で、長編小説の主要人物としてインド以東の人間を描いた作家に、Joseph Conrad がいるが、いかなる意味においても彼の作品でその地域の宗教・思想を真剣に扱ったとはいいがたい。一方、Lafcadio Hearn は、帰化した日本の宗教を深く研究した作家であったが、彼は遂に東洋を舞台とした長編小説を書かなかった。そのように考えるとき、Kipling の *Kim* は、東洋の宗教を扱った文学作品が帝国主義の世界にあつていかなる存在でありえたかを知る貴重な資料となりえるであろう。これは、また研究する人間が東洋人である場合はなおさらである。

確かに、文学作品は時空を越えて消費されるものである。しかし、読書行為は個々の人間によってなされる以上、時空軸のある一点に規定される。したがって、文化的・歴史的拘束を逃れることは出来ないのである。ある作品に対して、その作品が生産された文化の主流に属する人間によって読まれる場合と、その周辺に位置する人間、更にはその文化圏外に属する人間によって読まれる場合では、読書行為によって完成される作品の姿はかなり違ったものになるであろう。*Kim* においても、イギリス人男性によって読まれる場合と、かつての英国領の住民によって読まれる場合、また女性によって読まれる場合とでは、その姿はおのずと異なったものになるであろう。したがって、評価は食い違ってくるのであるが、それはあくまでも文学作品の可能性がもたらすものである。例えば、*Kim* に白人女性が描かれていないというフェミニズムの視点からの批判は正当であっても、そのことが男性やそれ以外のものが見事に描かれていないということにはならない。

本論において、インド以東に属する筆者が *Kim* および Kipling の東洋理解を検証する意味は、その評価によって作品や作者の合否を付けることではなく、インド以西の研究者によって下された評価を補完することである。つまり、Kipling が *Kim* において、インド以東に越境したかどうかを見極めることにより、西欧人の読者の目の下にあつては隠蔽されてしまう部分を作品に付加することで作品をより複雑なものにする試みである。

## 2. Teshoo Lama について

元来、東洋研究を意味するオリエンタリズムという概念に対して、フーコー等の理論を援用して、オリエンタリズムを西洋中心主義のイデオロギーによって歴史的に編み出されたディスコースとして読み直した Edward Said は、ペンギン版の *Kim* に対して、

“Introduction” を書いている。彼はそこで、Kipling がいかにインドを西欧的視点から構築しているかを力説して、the lama の自分の魂の解放を喜々として語る言葉に対し、Said は “There is some mumbo-jumbo in this of course, but it shouldn't all be dismissed. The lama's encyclopedic vision of freedom strikingly resembles Colonel Creighton's Indian Survey, in which every camp and village is duly noted.”<sup>2)</sup> と分析を始める。しかし、短絡的に the lama の言動に植民地支配者のイデオロギーを読み取るのではなく、チベット人の視点から脱構築すべきであろうが、Said はインド以東の文化に対して極めて無関心であり、正直なところ、東アジアに対しては Basil Hall Chamberlain や Hearn はもちろん、Kipling よりもはるかにオリエンタリスト的である。悪しきオリエンタリストに対しては、*Kim* のなかでも the Sahiba が痛烈に非難をしている。 “The others, all new from Europe, suckled by white women and learning our tongues from books, are worse than the pestilence.” (p.124)

すでに述べたように *Kim* の先行研究において、主要な登場人物である the lama は、東アジアの文化や思想を代表する存在としては、あまり重視されてこなかった。

同時代の批評家は、たとえ魅力を感じているとしても、the lama に対してはインドを描くため、もしくは、エキゾチシズムを加味するための背景のひとつとして考えている。

例えば、次の引用は、二つの書評の the lama に言及した部分である。

And in the background there is always the impressive figure of the lama, whose *mysterious* apophthegms about the Wheel and the most Excellent Law form a *deep and solemn accompaniment*, as it were, to the music of the whole composition. You do not stop to inquire whether he or any one else is true to life. (Italics are mine.)<sup>3)</sup>

The Lama has come from Tibet in search of a sacred river, and he meets a street Arab, . . . —*the object is henceforth to describe India*: we shall see how he does this, and Mr. Kipling shall be measured by our standard. (Italics are mine.)<sup>4)</sup>

西欧諸国には、仏教の知識に関しては、その研究の盛んであったドイツを通して入ってきていただろうが、長い間鎖国状態にあったチベットは、その膨大な距離とも相まって、西欧諸国にとっては未知なる国であった。<sup>5)</sup> おそらく、一般のイギリス人は、その

2) Rudyard Kipling, *Kim*, ed. Edward W. Said (Penguin Books, 1989), p.19. 以下の *Kim* への引用は、この版のページ数のみ本文に記入。

3) Roger Lancelyn Green, ed. *Kipling: The Critical Heritage* (Routledge & Kegan Paul, 1971), pp. 270-1.

4) *Kipling: The Critical Heritage*, p. 289.

5) 19世紀末の時点では、チベットは今だ大英帝国の視野には入ってなかったようである。例えば、19世紀の大英帝国を網羅的に記述した Edgar Sanderson の *The British Empire in the Nineteenth Century* (London: Blackie & Son, Limited, 1898) という5巻に及ぶ著書には、どこにも一切チベットの言及はない。

存在すら知らなかったであろう。したがって Kipling の同時代の批評家にとっては、インドもチベットも中国もおなじくエキゾチックな存在にすぎなかったのであり、チベット仏教僧がインドの風物の一つと考えられたとしても不思議ではないであろう。

このように同時代の批評家は Kipling をいい意味でオリエンタリスト、東洋の紹介者とみているのに対して、Kipling を悪しきオリエンタリストとして批判的にみる批評家からは、the lama が建て前は導師でありながら実際は Kim が彼を導いているのであるという。

It is the figure of Teshoo lama which makes claims on behalf of Kipling's attitude to religion possible, and yet even he, most sympathetic of holy men, *is seen as childish, unthinking, incapable*—to the point of self-destruction—of existence in the real world. Despite the supposed sympathy for the lama, and Kim's growing affection for him, none of the characters seems to have the slightest qualms about abusing his spiritual quest by turning it into the cover for a counter-espionage mission, and, moreover, keeping him in the dark about the fact. Also, the moral of the quest would seem to be that *without the help of the white man, the native has no hope of reaching enlightenment, salvation, full human status, or whatever*: note the lama's insistence that 'the Search is sure' once Kim returns to him, and his equal conviction of the impossibility of success in his absence. Also, much has been made by critics of the fact that when, at the end of the book, Teshoo achieves enlightenment, he renounces Nirvana at the cost of great spiritual suffering, purely for Kim's sake (*the implication no doubt being that this is only right, since he would not have got there without Kim's help*), whereas, in fact, as a Tibetan—and therefore Mahayana—Buddhist, there is no question of his going to Nirvana until all sentient beings are ready to go, and in this cosmic perspective Kim is almost entirely irrelevant. (Italics are mine.)<sup>6)</sup>

これに対して、例外的にはあるが、すでに触れた Shahane は、Kim の自我の完成 (“the full stature of his selfhood”) を獲得する過程で彼に影響を与える3人 (“three distinct but divergent forces embodied in the personalities of Mahbub Ali, the lama, and Father Victor”) のうち、the lama を含めている。<sup>7)</sup>

そして Shahane は、the lama の性格の中に、チベット仏教が深く影響を受けたタントラ仏教の特質を挙げ、それが Kim を導く the lama に重要な意義を与えていると分析す

6) Patrick Williams, “Kim and Orientalism,” *Kipling Considered*, ed. Phillip Mallett (London: Macmillan, 1989), p. 38.

7) Vasant A. Shahane, “Kim: The Process of Becoming,” *Rudyard Kipling's Kim*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House Publishers, 1987), pp. 9-23.

る。

一方、Kim に登場する人物の素材を綿密に調査した Peter Hopkirk は、the lama に関しては、次のように友人の指摘を紹介している。

She [Zara Fleming, a Tibetan-speaking scholar] pointed out that ‘Teshoo Lama’ simply meant ‘Learned One’, and could apply to many Tibetan clergy, and she knew of no celebrated pilgrim who had travelled to India from Tibet at around this time. So far as the two monasteries were concerned, however, ‘Such-zen’ could be a corruption by Kipling, who spoke no Tibetan, of ‘Tso-chen’, a ‘Red Hat’ monastery. Similarly, ‘Lung-Cho’ monastery could be ‘Lung-Kar’, a remote and little-known lamasery.<sup>8)</sup>

また Hopkirk は、上記の引用の後に、別の友人から Kipling の父親の手紙に彼の勤める博物館に一人のラマ僧がやってきたことを指摘されたことを報告している。

このように、the lama は見事に造形された東洋人、スパイ活動の隠襲として利用された人物、白人の保護の下でしか生きていけない幼兒的東洋人、そして Kim の精神的な成長に影響を与えた人物といった、様々な評価がある。実際、現実の人間が多面性をもっているのとまさに同じように、それぞれの the lama の人物評価を裏付ける証拠を作品の中に見い出すことができる。ただ、そこにはおのずから、作品の構造によって決まってくる優先順位が存在することは間違いないであろう。

### 3. チベット仏教について

Teshoo Lama を論じるに当たり、彼が代表する仏教とチベット文化について触れなければならない。筆者は仏教学に関しては門外漢であり、誤謬や知識の浅さは西欧人の研究者と変わらないであろうが、ただ、最も身近な宗教であると感じられる文化圏に生きていることは確かである。

まず最初に、チベットの仏教を単に仏教といわず「チベット仏教」ということについて考察してみよう。チベット仏教は、ダライ・ラマ14世によると釈尊の教えを奉ずる正当な仏教であるという。

チベットの宗教はラマ教とよばれる体系をつくりあげたラマの宗教であると考えている人々がいる。かれらはいふ。それはブッダの教えと遠くへだたったものである。しかし、これはまったくの誤解である。なぜなら、ブッダの教えとは別のラマの教えなどというものは存在しないからである。チベットにおいて仏教を形づくっ

8) Peter Hopkirk, *Quest for Kim: In Search of Kipling's Great Game* (London: John Murray, 1996), p.41.

ているすべての経典や密教経典はブッダその人によって教え示されたものである。さらに、これらの諸経典は、インドから来た学徳すぐれた仏教僧によって、現実性とその正しい意味が三重に吟味されたうえで決定されたのであった。<sup>9)</sup>

一方、中村元は、チベット人の自らの仏教に対する考えを紹介しつつ、そこには他と異なる要素を否定できないという。

チベットの仏教はしばしばラマ教 (Lamaism 喇嘛教) と呼ばれる。ラマとは「すぐれた人」という意味で、「師匠」をさす。チベットで発達した仏教では師匠から弟子への伝統をとくに重んじ、徳の高い僧侶をラマと呼ぶところから、その仏教がラマ教と呼ばれるのであるが、しかしチベット人は決して自分らの宗教をラマ教とは呼ばない。この呼称は、シュラーギントヴァイトが一八六三年にすでに言及しているが、彼自身は採用しなかった。こういう呼称を用いることについては専門学者の間で異論がある。すなわち、「ラマ教」という名を用いると、それは仏教とは別の宗教であるかのごとき印象を与える。しかしチベット人自身の意識によると、かれらは「仏の宗教」(Sañ-rgyas-kyi chos) または「正統の宗教」(nañ-chos) を奉じているのであって、インド以来の正統説にほかならないと考えているのである。しかしまた他面から考えてみると、チベットの仏教が「ラマ教」という名称で知られているということは、それが一般の仏教とはいちじるしく異なった要素を含み、異なった印象を与えるからにほかならない。南アジアの仏教、シナ・朝鮮の仏教はもちろん、日本の仏教でさえも、仏教以外の別の名で呼ばれることは、かつてなかった。だから「ラマ教」という呼称が一般に行なわれているという事実のうちに、われわれはすでに複雑な問題の存在することを予知しうるのである。<sup>10)</sup>

我々がチベット仏教を想起するとき、まず第一にダライ・ラマが観音菩薩の生まれ変わりであるといった活仏思想の存在を思い出す。釈尊自身も何度も生まれ変わったといわれるが、しかしこれは後世ゴータマ・ブッダが神格化される過程で生まれた伝説であり、原始仏教にはなかった考えであるという。<sup>11)</sup> この活仏の考え方は他の仏教圏にも存在するのであろうが、チベットでは制度化されており、中国の支配下におかれる前は、ダライ・ラマや阿弥陀如来の生まれ変わりであるパンチェン・ラマは宗教指導者だけではなく、絶大な政治権力も保持していて、これがチベット仏教を差異化する重要な要素であることは間違いないであろう。

9) 第十四世ダライ・ラマ、『智慧の眼』、菅沼晃訳 (けいせい出版、1988)、293頁。

10) 中村元、『東洋人の思惟方法 4 / 中村元選集第4巻』、(春秋社、1964)、5頁-6頁。

11) 中村元、『ゴータマ・ブッダ——釈尊の生涯——原始仏教 1 / 中村元選集第11巻』、(春秋社、1969)、512頁-517頁を参照。

確かにチベットでは、ゲルク派のソナム・ギャムツォがダライ・ラマ1世に就いて以来、後期インド仏教に強い影響を受けた、密教性の強い仏教を信奉し、転生活仏制度を支配体制の中心原理にして、ラマを頂点とする祭政一致の統治が行われてきた。ラサ周辺の農民は一部の支配階層の仏教僧により、西欧近代社会から見れば搾取されてきたのである。そのような特殊性がチベット仏教にあるとしても、それが万人を救済する理念を標榜する宗教である大乘仏教の正当性を守っていることは、中村自身もいつている。

大乘仏教のはじまりは、インドにおいて、「ヒンドゥー教の形成に呼応するように、仏教でも紀元前一世紀ころから新しい運動がはじまった。その中核となったのは、仏塔を中心に集まった、説教者（法師）たちをリーダーとする在家信者の集団」から起こったのであった。一方、「出家修業者の僧院を中心とする旧来の教団が、法すなわちブツダの教えを基本に、その解釈に腐心していたのに対し、この新運動はブツダを信仰の中心にすえ、仏徳を讃え、その慈悲の力で自分たちも理想の世界に入れると考えた。僧院の仏教が出家者のみの悟りを問題としていることに反駁して、万人の救済の宗教を打ち立てようとしたのである。かれらはその新運動を自ら大乘（Mahāyāna）とよび、旧来の仏教を小乗（Hīnayāna）と貶称した」<sup>12)</sup>のであった。

Kipling がインドにやってきた仏教僧を上座部（小乗）仏教を受け入れたスリランカ（セイロン）のような地域ではなく、大乘仏教を奉ずるチベットを選んだのは偶然ではないであろう。次の章では、チベット仏教が *Kim* にどのように反映されているかを検討してみる。

#### 4. *Kim*における the lama 及びチベット仏教の妥当性

チベット仏教は、インド仏典の翻訳の集成書である膨大なチベット太蔵経に基づいて成立している。そしてチベット密教はインド仏教後期密教（タントラ仏教）に強い影響を受けているのである。そこから、『死者の書』に見られるような、中国や日本にない独特な死生観が生まれてくる。このチベット密教の特長は、*Kim* に現れているのであろうか。唯一それらしきものは、作品の最後に登場する。そこでは、過労から回復した *Kim* に対して、the lama は、彼の肉体から魂が遊離したことを語る。彼は “Yea, my Soul went free, and, wheeling like an eagle, saw indeed that there was no Teshoo Lama nor any other soul. As a drop draws to water, so my Soul drew near to the Great Soul which is beyond all things.” といってから、全インドが、全体像から個々の村といった細部まで一望できたといい、時間と空間から解き放たれた状態を語る。

---

“...I saw them at one time and in one place; for they were within the Soul. By this I knew

12) 『インド思想史』、72頁。



the Soul had passed beyond the illusion of Time and Space and of Things. By this I knew that I was free. I saw thee lying in thy cot, and I saw thee falling downhill under the idolater—at one time, in one place, in my Soul, which, as I say, had touched the Great Soul. Also I saw the stupid body of Teshoo Lama lying down, and the *hakim* from Dacca kneeled beside, shouting in its ear. Then my Soul was all alone, and I saw nothing, for I was all things, having reached the Great Soul. And I meditated a thousand thousand years, passionless, well aware of the Causes of all Things. Then a voice cried: ‘What shall come to the boy if thou art dead?’ and I was shaken back and forth in myself with pity for thee; and I said: ‘I will return to my *chela*, lest he miss the Way.’ Upon this my Soul, which is the Soul of Teshoo Lama, withdrew itself from the Great Soul with strivings and yearnings and retchings and agonies not to be told. As the egg from the fish, as the fish from the water, as the water from the cloud, as the cloud from the thick air, so put forth, so leaped out, so drew away, so fumed up the Soul of Teshoo Lama from the Great Soul. Then a voice cried: ‘The River! Take heed to the River!’ and I looked down upon all the world, which was as I had seen it before—one in time, one in place—and I saw plainly the River of the Arrow at my feet. At that hour my Soul was hampered by some evil or other whereof I was not wholly cleansed, and it lay upon my arms and coiled round my waist; but I put it aside, and I cast forth as an eagle in my flight for the very place of the River. I pushed aside world upon world for thy sake. I saw the River below me—the River of the Arrow—and, descending, the waters of it closed over me; and behold I was again in the body of Teshoo Lama, but free from sin, and the *hakim* from Dacca bore up my head in the waters of the River. It is here! It is behind the mango-tope here—even here! ” (pp.337-8)

いわば、『死者の書』で語られる「風（ルン）＝意識」が輪廻の輪から脱却、つまり解脱の瞬間である。<sup>13)</sup> Teshoo Lama の魂は、ヒマラヤでの長い苦しい旅の後、マンゴーの木の下での二日間の断食と瞑想の果てに、肉体を離れ時空の桎梏から飛び出し、“the Great Soul” と融合する。しかし、次の瞬間、ある声が、“What shall come to the boy if thou are dead?” と呼びかけると、the lama は、Kim のことが気がかりになって肉体に戻ってしまう。これは、いわば煩惱であろう。ただ、Teshoo Lama が元の肉体に戻った瞬間、彼が追い求めていた「矢の川」を発見するのである。この順序は、つまり魂の遊離とその肉体への回帰の後に、「矢の川」を発見するという順序は、the lama の探求の真の意味を暗示しているのではないか。ただ、そのことに関しては、また後に触れることになる。

ところで「矢の川」のことであるが、その由来は本文では次の様に説明されている。

13) 『チベットの死者の書』、川崎信定訳（筑摩書房、1989）、174-5頁を参照。

“...When our gracious Lord, being as yet a youth, sought a mate, men said, in His father's Court, that He was too tender for marriage. Thou knowest?”

The Curator nodded; wondering what would come next.

“So they made the triple trial of strength against all comers. And at the test of the Bow, our Lord first breaking that which they gave Him, called for such a bow as none might bend. Thou knowest?”

“It is written. I have read.”

“And, overshooting all other marks, the arrow passed far and far beyond sight. At the last it fell; and, where it touched earth, there broke out a stream which presently became a River, whose nature, by our Lord's beneficence, and that merit He acquired ere He freed himself, is that whoso bathes in it washes away all taint and speckle of sin.”(pp. 57-8)

このブッダの逸話に関して幾つかの釈尊伝を当たってみると、次の一説があった。

さて、競技会の種目としては、文字を書くこと、算数、その他の学科もありますが、シッダールタ太子は楽々と優勝します。スポーツでは競走、跳躍、相撲などのあとで、弓があります。これが当日のよび物です。まとは鉄の鼓をおき、少年たちが次々に技をきそいます。シッダールタ太子の番になると、まとをずっと遠くに置かせ、その後に鉄でつくった猪七個と、鉄でつくったターラー樹七本を立てさせます。太子が弓をひこうとすると弓も弦もいっぺんに折れてしまいます。そこで太子は「これよりもよい弓はないのか」とたずねると、父のシュッドーダナ王はたいそう喜び「汝の祖父のシーハハヌ（師子類）王が使っていた弓があるが、誰もこれを張ることさえできないので、今は天廟（天寺）におさめ、香花を供えて供養している」と申します。そこでさっそくその弓をとりよせませんが、少年たちは誰一人として張ることはできません。マハーナーマン大臣も試みますが弓の弦はびくともしません。最後にシッダールタ太子に渡すと太子は坐ったまま身を動かさず、左の手に弓を持ち、右の手の指先で弦を軽くつまんで張ります。その弦の音が遠くまで鳴り響き人々はびっくりします。その矢をはなつと、ならべてあった鉄の鼓を射抜いたうえ、空高く舞いあがり、インドラ（帝釈天）が空中で受けとめて、三十三天に持って行き、天上ではこの日を記念し、今でも祝日になっているそうです。

太子はまた次の矢を射ると、七本の鉄のターラー樹と、七個の鉄の猪とを貫いて地中にささりこみ、そこに井戸がわきでました。今でも人々はこれを「矢の井戸」とよんでいるそうです。<sup>14)</sup>

14) 渡辺照宏、『新釈尊伝』、(大法輪閣、1966)、71頁-72頁。

これは、婿選びの際の腕較べで、the lama のいつていることと骨子は一致している。両方ともゴータマ・ブッダがブッダガヤの菩提樹の下で成道する以前の逸話であり、弓の技較べで、ゴータマ・シッダールタは、最初に与えられた弓を折ってしまい、次にだれも引けないぐらいの強弓を使つて的を射て、その矢が地面に突き刺さって水が湧き出るといふ話である。上述において、仏教が民衆に流布するにしたがつて、ゴータマ・ブッダの神格化が行われていったという中村の説を紹介したが、この逸話も後世の神格化のために付加された伝説であらうし、これが解脱の特効薬と考えるのは、一般信者ならともかく、Teshoo Lama などのような深く仏典を研究したものがそのような俗信を信じるなど考えられない。ブッダの教えは、人はこの世の無常を悟り、煩惱の束縛から自由になって解脱の境地に入ると説いている。また、沐浴は極めてヒンドゥー的であり、高山地方のチベット人にはその習慣はなかつたようである。

以上の点から、the lama の「矢の川」の発見の旅は、Kim において、Kim のロシアのスパイ活動の阻止とともに、2本の大きな筋の一つと考えられるが、チベットの高僧がおこなうものとしては、どうも説得力に欠けるようである。それが、the lama の存在意義を低く評価させている。多くの研究者が、the lama の「矢の川」の発見の旅を Kim のスパイ活動の隠蔽とみなす理由がそこにある。しかしだからといって、Kipling が the lama を冒険小説の一つの仕掛けとして使つたかは即断できない。なぜなら、Kim は、the lama に対する思いとは裏腹に、「矢の川」に対しては最初からほとんど関心をもつていないし、忘れたこともあつた。<sup>15)</sup> 作品の最後で the lama が興奮しながら Kim に「矢の川」を発見したことを物語つても、the lama の体のことを心から心配するだけで、「矢の川」についてはまったく反応を示していないのである。

Kipling は、the lama のゴータマ・ブッダの聖地への巡礼の旅に、単に自らの穢れを洗い流す以上の意味をもたせているのではないか。もっとも、Kipling のチベット及び仏教に関する知識の深さがどの程度なのかを確かめるのは現段階では困難である。Kim の中には不正確な記述もいくつかみられるようである。<sup>16)</sup> おそらく、彼の父親や、Kim のなかに挙がつている Samuel Beal や Stanislas Julien の書物で仕入れたのかもしれない。ただ、Kipling の仏教への知識の深さはどうであれ、彼は肌で仏教に触れている。その経験が詳しく書かれているのは、彼が1889年、インドを旅だつて、ビルマ、シンガポール、ホンコン、そして日本を訪れた際の *the Pioneer* に掲載されたレポートである。重要なことは、そのレポートは Kipling がイギリスの文壇に華々しくデビューするまえに書かれたものであり、血気盛んな若者の正直な気持ちが吐露されている。少なくとも、

15) Kim は、最初、the lama についていく理由を次のように Mahbub Ali に語っている。“Nothing. I am now that holy man's disciple; and we go a pilgrimage together—to Benares, he says. He is quite mad, and I am tired of Lahore city. I wish new air and water.” (p. 67). また、“I had forgotten the River.” (p. 169) といったこともある。

16) 例えば、the lama の数珠の数を81個としている。(p. 100)

17) Rudyard Kipling, *Kipling's Japan: Collected Writings*, ed. Hugh Cortazzi and George Webb (London: The Athlone Press, 1988)を参照。

後の大英帝国を背負って立つ公人としての Kipling はそこには存在しない。例えば彼は、ピルマの仏教寺院で、仏教徒の女性の敬虔で真摯な信仰に触れ旅行者気分の自分に対して後ろめたさを感じたり、鎌倉で大仏に対して無作法なことをする欧米の旅行者に対して義憤を感じたりしたことを書いている。鎌倉の大仏を題材にして書いた詩の一部が、*Kim* の第1章から3章の冒頭に挙げられているのは、注目に値する。<sup>17)</sup> このように、彼の東アジアへの旅が、彼に仏教に対する理解、少なくとも敬意をもたらしたのであろう。そのことは、*Kim* がそれ以前に書かれたインドを舞台にした作品とかなり趣が異なることから明らかであろう。

*Kim* において特に注目したいのは、単にチベット仏教の教義や儀式ではなく、the lama の役割そのものである。チベット仏教は通称としてラマ教といわれるが、ラマとは師僧と漢訳されるように衆生を解脱へと導く人間である。中村は以下のようにいっている。

個人が人格的結合によって共同体の中に没入するという意識に乏しく、家族観念も民族意識もはっきりしていないということになると、チベット人はいったいいかなる基準によって行動するのであろうか。

それは宗教上の師としてのラマに帰依することである。このラマに対して、絶対的に帰投する態度は、(一) 個人的側面においては宗教的靈威ある特定人に対する絶対的帰投の態度となり、(二) 社会的側面においては、ラマ教の社会的秩序に対する絶対的帰投の態度となってあらわれる。<sup>18)</sup>

つまり、チベット仏教においては、ラマと弟子の関係は絶対であり、ラマは弟子に対して大乘的役割を担っているのである。*Kim* においても、the lama は自分の魂の解放を犠牲にしても、*chela* である Kim を解放しようとする。そしてその報いとして、彼は「矢の川」を発見するのである。つまり Kim の解放と「矢の川」の発見の旅とは同一線上にあるのである。もし、それが狭義の意味で仏教的な解放(解脱)に限定されるのではなくて、Kim を何かある縛りから解放するということなら、それは Kipling が作品において、the lama をチベット仏教という枠組みを越えて普遍化しえたことにはならないだろうか。では、その縛りとは何であろうか。それは the lama が再三 Kim に諭す言葉の中にある、ゴータマ・ブッダの教えの中核でありそれまでのバラモンの教えとの最大の違いである、階層を否定したことであろう。以下において、その点を少し詳しくテキストを考察してみよう。

18) 『東洋人の思惟方法4/中村元選集第4巻』、40頁。

## 5. Kim への感化力

*Kim* において、主人公 Kim の登場の仕方は、Joseph Conrad の *Lord Jim* の Jim の最初の描かれ方と同じぐらい印象深く見事である。

作品の冒頭で、Kim はこのように登場する。“He sat, in defiance of municipal orders, astride the gun Zam-Zammah on her brick platform opposite the old Ajaib-Gher—the Wonder House, as the natives call the Lahore Museum. Who hold Zam-Zammah, that ‘fire-breathing dragon’, hold the Punjab, for the great green-bronze piece is always first of the conqueror’s loot.” (p 49)

この帝国主義批判の立場からは格好の餌食にされる引用の後に、物語の語り手がたとえ “though” で始まる 3 つの節で Kim の行動に譲歩を加えようとしても、“the White Man’s Burden” を背負った人物が著した作品であると認識する読者は、Kim は生まれながらにして支配者としての特権が与えられていることに疑念の余地を挟まないであろう。

また、Kim はあらゆる人間をそのカーストによって判断しようとする。そして実際彼を取り巻く登場人物はほとんど全て白人を頂点とするヒエラルキーに組み込まれ、それ無批判に従属している。Mahbub Ali も Hurree Chunder Mookerjee (the Babu) もである。

そして、Kim には常に白人 “sahib” に押し込めようとする力が働いている。Teshoo Lama に会うまえにも、ラホールフリーメーソンから白人としての教育を受けさせられようとするが、恐らく父親の愛人であった骨董屋（実は阿片を売買している）の女性の助けでそれから逃げていたのである。しかし、父親が生前属していた連隊 (“the Mavericks”) に拘束された後、兵隊を養成する学校では、Kim は白人の社会に閉じ込められる。自分をそこから逃れさせてくれることを期待して Ali に手紙を書いても、Ali は Kim を “Once a Sahib, always a Sahib.” (p.155) だといって、Kim を広漠としたインドの先住民の社会に逃げ込むことを手伝ってくれることはない。また、the lama の資金援助で St Xavier’s 校で “sahib” としての教育を受け、また休暇中と学業を修了後に他の諜報部員によって与えられたスパイとしての訓練と実践を通して、Kim はイギリス人としてのアイデンティティを 確立することを強いられる。そしてロシア人とフランス人の二人によるロシアの南下のためのスパイ活動を阻止し、疲労と心労のために寝込んだ Kim がようやく回復した頃、Ali と the Babu は、Kim のスパイとして活躍する将来を予言する。まさにそれを受け、John A. McClure は、“At last he is ready to assume a place among the imperial elite of the secret service.” と断言する。<sup>19)</sup>

このように、Kim は生まれながらにして大英帝国の一兵卒、もしくは諜報部員になるべく、運命づけられているのである。つまり、彼は白人というカーストにがんじがらめにされているのである。Kim がまた、“the Mavericks” に拘束された後、インドの先

19) John A. McClure, *Kipling and Conrad* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1981), p. 72.

住民の世界に期限付きながらも戻ることが出来たのは、Creighton 大佐の下で、“the Great Game”、すなわち、ロシアの英国領インドへの南下を妨害する諜報活動に協力することに応じたからである。

しかし、そのような世界に生きる Kim の前に、Teshoo Lama だけは、Kim のカースト的世界観には組み込めない存在として登場する。Kim の Teshoo Lama に対する第一印象は、“such a man as Kim, who thought he knew all castes, had never seen.” (p.52)であった。

それでも、最初は奇妙な人物以上には見ていなかった Teshoo Lama に対して、彼を “Never have I seen such a man as thou art” (p.92) と Kim に強く肯定的に印象づける出来事が幾つか描かれている。その最初で、極めてシンボリックな出来事は、ある小川で Kim と the lama が蛇に遭遇したことである。文化的遺産とでも呼ぶべきものが存在するのなら、Kim は白人の血によって非常にその蛇を恐れるのだが、恐れるどころか蛇に対して哀れみさえ感じる the lama をみて、一種の敬意すら感じるのである。これは単に、不気味なもの、恐ろしい生き物に対して平然としている人に対して感じる一種の尊敬というものだけではないであろう。蛇を邪悪なものとして排除するキリスト教に対して、輪廻の輪に捕われ苦しむ生き物として生きるものの一つとして、慈悲の対象とみなす仏教思想を感じて、彼の閉ざされた世界観に一条の光がさしたのである。Kim は自分の白人的弱点に対して、the lama の仏教の信念の強さを感じたにちがいない。この蛇に関する逸話は、the lama と Kim の関係が、近代以降の東洋と西洋の関係の縮図、つまり the lama は常に受動的であるとする見方に対する、一つの有力な反証であろう。

確かに Kim は白人をヒエラルキーの頂点とするカースト的世界観に縛られているものの、一方で彼を周りの東洋人が “Friend of all the World” と呼ぶように、彼は決してそのような世界観に安住しているわけではなく、その境界を越えることが彼の喜びでもある。そして、その Kim に対して、終始、the lama が “To those who follow the Way there is neither black nor white. Hind nor Bhotiyal. We be all souls seeking escape. No matter what thy wisdom learned among Sahibs, when we come to my River thou wilt be freed from all illusion--at my side.” (p. 261)とゴータマ・ブッダの教えに基づいた彼の信念を論ず。そしてそれが、Kim の世界観を変えていったことは、彼の言動から読み取れるであろう。実際、St Xavier's 校に入学した後、the lama に Benares で再会したときに、Kim は次のように語っている。

‘I was made wise by thee, Holly One,’ said Kim, forgetting the little play just ended; forgetting St Xavier’s; forgetting his white blood; forgetting even the Great Game as he stooped, Mohammedan-fashion, to touch his master’s feet in the dust of the Jain temple. ‘My teaching I owe to thee....(pp. 237-8)

Teshoo Lama が人種的ヒエラルキーを超克する現世からの解脱を象徴する存在とみる  
とき、Kim を含む全ての登場人物の人種観に対するアンチテーゼである。もちろん、  
Kim 自身が the lama によって感化されて完全にカーストの世界を超克するかどうかは別  
問題だが、彼の仏教を単に東洋的不可解さを醸成する道具立てとして片付けることは出  
来ない。

## 6. Kim と東洋体験

これまでみてきたように、テキストには一貫して Kim を白人 “sahib” のカースト内  
に取り込もうとするベクトルが働いている。もし、それに抗えば、Kipling の短編で何  
度となく扱われているように、インドでは、文化を越境する “strong men” ではない白  
人はアイデンティティの危機に直面し、破滅していくのである。例えば、Kim におい  
ても、Kim の父親は大英帝国の部隊からドロップ・アウトした後、先住民の世界を徘徊  
し、息子には白人社会で手厚く保護されることを期待しながらインドの巷間で阿片に溺  
れて死んだことが語られている。つまり、Kipling のインドにおいては、白人は  
“sahib” として振る舞う限りにおいて安全であるが、その法を越えようとするとき、  
個人の脆弱さが露呈するのである。しかし、Kim には、それとは相反するベクトルが確  
かに存在し、テキストにダイナミズムを与えている。

テキスト内に相反する方向性をもったベクトルが拮抗しているとき、その作品は緊張  
感をみなぎらせ、より高次へと作品世界を高めていくのである。例えば、*Lord Jim* にお  
いて、Marlow 船長の Jim に対する高い評価と期待が、それらを突き崩す事実を目のあ  
たりにする苦悩と激しく拮抗しあって、作品の人間に対する洞察を極めて深いものに  
している。まさにその様に、Kim においても、英国領インド世界のカースト原理の激烈な  
支配に対して、それを突き崩す新たな原理が Teshoo Lama によって持ち込まれるのであ  
る。

Margaret Peller Feeley によると、草稿段階の the lama は極めて無知で、ひ弱な、従属  
的で、Kim なしでは何もできない、いかにも西洋社会の産み出した典型的な東洋人  
であったということである。それが、作品を書き直していくにつれ、the lama が力強い個  
性をもった存在に変わっていったという。<sup>20)</sup> これは、Kipling の思い付きとして生まれ  
た作品の構想が、書くという過程を通じて、構想自体が Kipling の手を借りて作品を成  
長させていったとみるべきであろう。

もちろんその様な作品が生まれるためには、Kipling に東洋に対する認識を変えさせ  
る契機となる経験があったのも確かである。それはすでに触れた東アジアの旅で感じ

20) Margaret Peller Feeley, “The Kim that Nobody Reads,” *Rudyard Kipling's Kim*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House Publishers, 1987)を参照。

取った、ビルマでの仏教徒の敬虔な信仰であったり、日本での彼を圧倒するような清潔感であったのだ。つまり、好むと好まざると、そこに西洋文化に拮抗するような独立した文化を体験したことである。この否定しえない認識が、彼が英国領インドのカースト的世界に対抗する原理を持ち込めたゆえんであろう。

## 7. 結論

最後にもう一度、Teshoo Lamaの存在意義を検証してみよう。

冒頭でKimは“English”と説明されている。しかし、Kimは“a poor white of the very poorest”であり、彼が極度に嫌う一兵卒になるか、Creighton大佐の支配下において諜報部員として危険な任務を負わされる宿命にある。Kim以外の諜報部員は、アフガニスタン人やベンガル人であり、そういう意味では、彼は大英帝国内の白人のカーストの最下層に組み込まれた、つまり白人と東洋人の境界の際に生きる白人なのである。

今日でもSamuel Huntingtonが「文明」と「文明」の正しく引かれていない境界（“the false line”）で文明の衝突が起こると主張し、ソビエト連邦の崩壊後のポスト・冷戦構造における地域紛争や、おこるべき文明間の戦争を説明しているが、<sup>21)</sup> Kiplingは当初からこのような逃れられない文化の個人に対する支配力を信じていたのは間違いない。したがって、文化と文化の境界を横断することは、少なからぬ危険を孕んでいると主張する。このようなKiplingの描くインドでは、Kimが生まれながらの“sahib”であり、必要に応じてアジア人のように偽装している場合であっても、また教育やスパイとしての訓練を通してアジア性を脱却して“sahib”になっていくのであっても、彼が弱い人間で文化の境界を横断し続ける限り、深刻なアイデンティティの危機に直面せざるをえないであろう。すなわち、早晚父親のようになるか、あるいはpoor whiteのための学校で教育を受け、浅薄な白人優越主義というイデオロギーを刷り込まれ、アジア性を拒絶し、支配者の不寛容さを身につけ、そしてそれはとりもなおさず、自己を白人の狭い行動範囲に閉じ込めることになるのである。しかも彼は“a poor white of the very poorest”でしかなく、白人のヒエラルキーにおいては最下層に属する人間であり、結局のところ、カースト原理の支配する英国領インドの植民地支配体制の末端の一個の齒車になって、George Orwellが味わった悲哀を感じるようになるであろう。これは“At last he is ready to assume a place among the imperial elite of the secret service.”とは、程遠い状況にKimは追いやられるのである。少なくともKimを取り込む白人たちは、それ以上のものを彼に提供する気は全くない。ただthe lamaだけが、そこから逃れえる可能性をKimに与えるのである。

---

21) Samuel P. Huntington, *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order* (London: Touchstone Books, 1998)を参照。



実際 Kim は、父親の所属していた部隊に拘束されたとき、一兵卒になるための訓練を受けるために、Kim が嫌がるのもかまわず、将来の兵士を養成する孤児のための学校（“the Military Orphanage”）に入れられようとした。しかし、the lama が、Lahore 博物館で出会った東洋文化に造詣の深いイギリス人館長のような “sahib” になることを切望して高額の学資を申しでたおかげで、Kim はインドでは最高の学校である St Xavier's 校にはいることができたのである。一方、St Xavier's 校では、英語や測量学といった実学を教えられると共に、Kim はアジア性を脱却し隠蔽するように強いられ、また、彼は学校の塙の外へでて、インド人と接触することを堅く禁じられる。しかし、Kim はこの塙の外から逃れようとするが、これは単に窮屈な規律から逃れたいという少年特有の性癖からだけではなく、すでに触れたように、Kim 自身の口から語られる “chela (disciple)” と the lama との精神的つながりの強固さのためである。一方、大英帝国の制度内において白人優位のイデオロギーを刷り込まれている他の少年たちは塙の外へでてインド人とつき合おうなどとは、夢にも思わない。

Kim は夏期休暇や、学業を修了した後に、インドにおける諜報活動を統括する Creighton 大佐の命令によって、諜報部員として他の諜報部員から訓練されるが、それは地図を作成したり、人物を瞬時に見極めたり、記憶力をたかめたりするといった極めて実学的なものであった。一方、Kim は大英帝国という想像の共同体のマスター・ナラティブ、つまり英国主義を教え込まれた形跡は全くみられない。むしろ Kim に、ヒマラヤ山中で崇高な美しさについて語ったり、曼陀羅図を使って世界の根本原理を説明することで、精神教育を施すのは the lama の方である。

このように考えてくると、Kim の諜報活動の方便に使われただけだと評価されることの多い一見現実みのない理想化された the lama は、Kim の文化越境を可能にしている守護天使の様な働きをしているといえる。the lama は、Kim が「東」であろうと「西」であろうと、その文化的桎梏から抜け出すための思想を提供しているのである。そして、物語の最初で描かれた Kim の人種的傲慢さをとり除き、かつてイギリス人に裏切られた山岳民族の女性に対して誠実に接しようとするようになるのは、the lama の感化ではなかったのか。Kim は、the lama との旅によって人種や階層を超越した、つまり彼自身がいったように、インドそのものが彼の “people” になったのである。

西洋近代社会の制度の下では、明治日本がそうであったように、非西欧の文化を身に付けた人々の生き方の多様さを隠蔽し抑圧する過程を伴うものである。それは物理的な力としてだけではなく、想像の共同体が確立するにしたがって、異質な文化は排除され隠蔽されるのである。しかし、Kim というテキストは、英国領インドという枠組みを残しながら、そのような制度によって隠蔽されたインドを、ベンガル人の the Babu のようなハイブリッドの人物でもなく、偏狭な “sahib” でもなく、ナショナリストでもない、Kim という人物を通して再発見しようとする。そして、その再発見という行為こ

そが Kim の行う越境なのである。

Kim が当初行っていた単に風俗を真似るといった文化越境ではなく、そのようなより本質的な越境は、作品の中では完成されなかったのかもしれない。しかし、一旦輪廻の桎梏から抜け出し解放された魂が Kim を救済するために再び生き返った the lama によっていつかは解放されるであろう。もし、Teshoo Lama が Tashi Lama、つまり OED の説明によるとそれは Panchen Lama の称号であるが、もし彼がパンチェン・ラマのことであるのなら、彼は阿弥陀如来の生まれ変わりである。チベットでは観音菩薩の生まれ変わりであるダライ・ラマにつぐリンポッチェ（活仏）である。

もちろんチベットにおける No.2の権力者であるパンチェン・ラマが弟子を一人しか連れずインドにやって来るのは現実としては考えにくい設定である。それはまた、先に引用した Peter Hopkirk の友人のチベット研究者が、一切それに言及しなかった理由であろう。しかし *Kim* はあくまでも虚構であることを忘れてはならない。事実関係の調査では突き止めることは出来ないのである。例えば、徳川幕府の副将軍であった水戸光圀が商家の隠居に我が身をやつして諸国を漫遊するのが虚構の世界である。Kipling がそのような意図がなかったとは否定できない。少なくとも、その解釈は、小説のテキストの許容範囲であろう。そのように解釈することによって、the lama が Kim のために登場人物の一人のカトリックの牧師が“Power of Darkness below!”というくらい法外な金額の学費をどのように捻出したかという謎も解けるのである。そしてまた、*Buddha at Kamakura (Amitabha) =Teshoo Lama=Panchen Lama (Tashi Lama)* という図式が成り立ち、*Amitabha*、つまり阿弥陀如来による Kim の救済という西欧人からは隠された主題が浮かび上がってくる。

Patrick Williams は、あくまで the lama を導くのは Kim であるといっている。確かに、最初はそうであった。しかし、テキストは単なる現実の模写ではないし、政治パンフレットではないのである。Kipling が作品を構想し、創作していく段階において、テキストは独立した成長を遂げていくものである。もしそのような展開がテキストに内在していなければ、文学作品は作者の日常的思考から一歩も越えないものにしか成りえないであろう。*Kim* は、東洋人の視点からは、当初のチベット仏教僧の「矢の川」を探す献身的な弟子であると同時に、有能な大英帝国のスパイになっていく少年 Kim の物語という少年の読み物から、the lama に付き従って苦難の旅を続け、その間、仏教的理念に感化された Kim が、新たなる世界観を獲得していく物語なのである。

## Kipling's Orient: Teshoo Lama and Other Characters in *Kim*

Yoshio Ise

Among English novelists who laid the settings of their novels in Oriental countries and British colonies in the East around the turn of the century, Rudyard Kipling can be said to have been the most noticeable to comprehend native religions and Oriental ways of life.

This paper attempts to examine how profound Kipling comprehended Oriental religions and their ways of life by analyzing the lama called Teshoo Lama, one of the main characters in *Kim*.

In *Kim*, the lama, who is accompanied by Kim, an Irish boy, has come from Tibet and is seeking for a sacred river called “the River of the Arrow.” The river is said to have originated where an arrow shot by Gautama Buddha fell and touched earth. According to the lama, its “nature, by our Lord's beneficence, and that merit He acquired ere He freed Himself, is that whoso bathes in it washes away all taint and speckle of sin.”

During the lama's quest for the river with Kim, who has his own secret mission to prevent Russian spies from surveying the northern part of India, he is teaching Kim his Buddhism ideas: “To those who follow the way there is neither black nor white. Hind nor Bhotiyal. We be all souls seeking escape.”

Teshoo Lama's Buddhism is Lamaism, which can be categorized into an exoteric school of Mahāyāna Buddhism. Hajime Nakamura, a prominent Buddhist scholar, says that “A unique and important characteristic of Lamaism, which distinguishes it from other schools of Buddhism, is that the living lama is more highly revered than the Buddha or the Dharma” and that “Submitting to the lama, a person endowed with religious charisma, is then the Tibetans' way of adhering to a social order.” Tibet has a religious society ruled by the Dalai Lama who is said to be incarnated by *Avalokitesvara*.

The paper analyzes Teshoo Lama's doings and sayings including his quest for the river in the text, comparing historical and religious facts concerning Tibet and Tibetan Buddhism. The result shows that even if Kipling's knowledge of Tibetan Lamaism is not always correct, the main idea of the strong relationship between the lama and his *chela* is reflected in *Kim*. Teshoo Lama gives a strong influence to Kim, though he appears to be a feeble, helpless and innocent character who is much more feeble, helpless and innocent in an early manuscript. In the finished *Kim*, the text has created an influential and independent Oriental character who believes in a non-Christian

religion, whatever the author himself believed in in his private life.

Accompanying the lama, Kim, who used to have the blood of Western Imperialism, begins to have a new personality and a new egalitarian world view. It can be said that Kim really becomes “Friend of the World” and the East as well as the West is his “People.”